

[総説]

NICUに子どもが入院中の父親の心理に関する文献検討

谷本 真唯

北海道医療大学大学院看護福祉学研究科看護学専攻 修士課程

キーワード

NICU, 父親, 心理

I. はじめに

近年、女性の社会進出や高学歴化などにより、少子化が進んでいる。第二次ベビーブーム後から出生数が減少傾向にあるが、その中で全出生数に対する低出生体重児の出生数割合や早産の割合は増加、もしくは横ばいとなっている（厚生労働省、2017）。この背景には、ハイリスク妊娠、ハイリスク新生児の増加に加えて、新生児医療の発展に伴う生存率の上昇も要因として挙げられ、新生児集中治療室（Neonatal Intensive Care Unit：以下、NICUと略す）への入院が必要な子ども（以下、NICU児と略す）が増加している。このようなNICU児の増加に伴い、NICUにおける子どもとその親に対して看護を提供する機会が高まっている。

子どもがNICUに入院する必要があるということは、早産や何らかの疾患を伴って生まれてきたと考えられる。小池（2009）は、超低出生体重児の父親が、児の急な出生や体重の小ささに対して驚きを感じ、恐怖や死への不安、予後への不安を抱くことを明らかにしている。つまり、父親にとって子どもがNICUに入院するという事は、様々な不安を抱え危機的状況に陥る要因であると考えられる。このような危機的状況から脱することは、その後の子どもの受け入れや家族の関係性構築に繋がると考えられ、NICU児の父親が危機的状況から脱することができるよう、NICU児の父親の心理を踏まえた看護支援が必要であると考えられる。

しかし、NICU児の母親を対象とした研究と比較すると、NICU児の父親に関する研究は少ない。さらに、NICU児の父親の心理について明らかにした研究はあるが、これらの研究知見を概観したものはない。そのため、NICU児の父親を対象とした国内文献から、NICUに子どもが入院中の父親の心理について得られた知見を概観し、NICU児の父親の心理を踏まえた看護を考える一助としたいと考えた。

<連絡先>

谷本 真唯

北海道医療大学大学院 看護福祉学研究科

E-mail: tanimai.911.617@gmail.com

II. 研究目的

本研究は、国内におけるNICU児の父親を対象とした文献を検討し、NICUに子どもが入院中の父親の心理を明らかにすることを目的とする。

III. 用語の操作的定義

1. 父親の心理：子どもがNICUに入院したことをきっかけに生じた父親の心の動き
2. NICUに入院した子ども：低出生体重児や早産児、先天性疾患、奇形など、NICUに入院した全ての子ども

IV. 研究方法

1. 文献検索

医学中央雑誌Web版Ver.5を利用し、検索が可能な1983年4月から2018年4月までの時点で「NICU」、「父」、「心理」、「思い」の4つのキーワードを用いて全期間を対象として、全て会議録を除いて検索した。その結果、1983年から2017年2月までに発表された論文が57件検索された。そのうち、重複している文献やNICU児の父親の心理を明らかにしていない文献を除外し、13件を分析対象とした。なお、NICU児の両親を対象としている文献に関しては、父親の心理に関する部分と特定できた結果のみを分析対象とした。

2. 分析方法

対象文献を年次推移別、研究目的別、対象者別、NICUに入院中の子どもの状態別、データ収集方法別に分類、整理をした。さらにNICU児が入院中である期間に限定して父親の心理について抽出し、心理の内容別に分類、整理をした。父親の心理に関する抽出方法は、質的研究の場合は、カテゴリーや対象者の語りから、量的研究の場合は、質問紙の項目から抽出した。抽出した心理をネガティブな心理とポジティブな心理に分け、小分類を〈 〉、大分類を《 》としてその内容を表記した。

3. 倫理的配慮

公表されている文献のみを用いた。

V. 結果

1. 年次推移

対象文献の研究概要を表1にまとめた。文献は発刊年の古い順に並べた。

対象となった13文献の年次推移は、2000～2005年が4件、2006～2010年が6件、2011～2015年が3件であった。

2. 対象文献の研究目的

父親の心理を明らかにすることが8件、NICU児の父親のストレスやコーピングを明らかにすることが2件で、その他に家族形成過程を明らかにすること、家族の体験を明らかにすること、父親が看護師から得る情報と母親への伝達内容を明らかにすることがそれぞれ1件であった。

3. 対象者

1) 対象者

父親が10件、両親が2件、子どもの家族（主に両親）が1件であった。

2) NICUに入院中の子どもの状態

NICU児の状態に関して、詳しい記載があった文献は13件中9件であった。低出生体重児・極低出生体重児・超低出生体重児・早産児・未熟児の子どもが最も多く7件、奇形をもつ子どもが1件、先天性疾患によって手術が必要となった子どもが1件であった。他4件はNICUに入院した子どもの状態について詳しい記載は無かった。また、低出生体重児を対象としていた7件のうち2件は、先天性疾患や奇形などがある子どもを対象から除外したという記載が確認された。

4. データ収集方法

面接調査が11件であり、そのうち半構成的面接法が10件、質問紙を使用した面接が1件であった。また、質問紙調査が2件であった。

5. 父親の心理の内容

対象文献から抽出した父親の心理を、ネガティブな心理とポジティブな心理の2つに分類したところ、ネガティブな心理が10分類、ポジティブな心理が7分類となった。

1) ネガティブな心理

対象文献から抽出した父親のネガティブな心理は、《不安》、《恐怖》、《悲しみ》、《戸惑い》、《驚き》、《苦しみ》、《無力感》、《緊張》、《逃避》、《怒り》という10種類に分類された。ネガティブな心理の内容を表2にまとめた。

(1) 不安

《不安》は対象文献13件中11件で記載され、今回抽

出された父親の心理の中で最も多かった。この分類の中では、子どもに対する不安が最も多く、〈子どもの成長・発達への不安〉に関する内容として、子どもの将来への不安（文献⑤、⑧）、予後への不安・障がいへの危惧（文献⑦）、小さい子どもの成長への不安（文献⑧、⑩、⑫）であった。子どもに直接関係することでは、他に〈子どもの病気や死への不安〉や〈子どもの状態に対する気がかり〉といった内容が《不安》の対象であった。

子どもに関係する内容に加えて、〈妻に対する不安〉、〈父親としての役割遂行の不安〉、〈生活上の不安〉といったものがあった。

(2) 恐怖

《恐怖》に分類された父親の心理では、子どもに触る事への恐怖（文献④、⑦、⑬）、NICUに来ることへの恐怖（文献⑦）、カンガルーケアや抱っこへの恐怖（文献⑦、⑧）など〈NICUに来て子どものケアに参加することへの恐怖〉に関する内容が多く挙がっていた。

(3) 悲しみ

《悲しみ》に分類された父親の心理は、初めて面会した時の子どもの姿に痛々しさを感じた（文献①、⑧）、医療器具に取り囲まれてかわいそう（文献⑧、⑨）といった〈治療中の子どもの状態を見た時の悲しみ〉が挙がっていた。また、〈期待通りで無かった子どもへの悲しみ〉は、父親の期待とは違った外表奇形をもったわが子に嘆き悲しむ（文献⑤）という内容であり、外表奇形の子ども父親からのみ得られた内容であった。

(4) 戸惑い

《戸惑い》に分類された父親の心理として、〈子どもに触れることへの戸惑い〉では、初めて触れる時にどこを触っていいかわからずどうしようという気持ちが強かった（文献⑨、⑬）と初めて子どもに触れる時の心理が挙げられていた。他に〈自分ができると思っていたことができないことへの戸惑い〉では、見れない（面会できない）・抱けない（文献③）といったものがあった。加えて〈疾患を持った子どもが生まれたことへの混乱と戸惑い〉では、胎児診断を受けていない予後不良の子ども父親は、出生直後に予後不良児であるという説明を受け混乱していた（文献⑤）。また、外表奇形があることについて出生前告知を受けていた父親でも、出生後「やっぱりか」という戸惑い（文献⑤）といった心理がみられた。

(5) 驚き

《驚き》では、管や点滴が入っていてショック（文献⑨）といった〈機械に囲まれ管を入れられた子どもを見た驚き〉や、早産で生まれたこと、小ささ・色への驚き（文献⑦）といった〈子どもの状態を見た驚き〉といったものがみられた。

表1 対象文献の概要

番号	著者	発行年	表題	研究目的	対象者	分析対象数	データ収集方法
①	濱田	2000	NICUに入院した極低出生体重児の父親の心理状態について—出生後早期における児の受容状況—	極低出生体重児を持った父親の児出生から1～2週間頃の早期の心理状態を知る	極低出生体重児の父親	51名	質問紙調査
②	川北他	2000	低出生体重児の父親の心理の変化—父親の不安と看護婦の認識の違い—	父親の心理を明らかにする	低出生体重児(2500g未満)で1ヵ月以上NICUに入院している児の父親	45名	質問紙調査
③	宮崎他	2003	NICU入院を経験した患児をもつ両親への意識調査(第2報)—親の心理的特性—	子どもがNICUに入院中や退院後の両親の心理的特性を調査する	NICUに子どもが入院した経験を持つ両親	128人	質問紙を用いた面接
④	村山他	2003	NICU入院の低出生体重児と対面する父親の思い	低出生体重児の父親が、児との対面時および助産師とのかわりにおいて、どのような思いや考えを持つかわ明らかにする	低出生体重児の父親	3名	半構造的インタビュー
⑤	明石他	2006	先天性外表面奇形をもつ児の父親の心の動き—急性期を脱するまで—	先天性外表面奇形をもつ児が出生後急性期を脱するまでの、父親の心の動きを明らかにする	当院NICUに入院した外表面奇形をもつ児の父親	4名	半構造的インタビュー
⑥	田中	2007	NICUに搬送された子どもと父親が母親に伝える情報とその思い	子どもの搬送先で、父親は看護師からどのような情報を得て、どのようなことに注意して母親へ伝達するのかわ明らかにする	出生日にNICU搬送入院となり、母親の初回面会までに複数回の面会をした父親	3名	半構造的面接
⑦	小池	2009	NICU入院期間中の超低出生体重児の両親の家族形成過程	超低出生体重児がNICUに入院している両親は、子どもにどのような思いを持ち、どのような家族形成過程を経るのかわ明らかにする	NICUに入院する超低出生体重児の両親	3組	半構造的面接
⑧	松本他	2009	早産児をもつ父親が感じるストレス—妻の入院から児の退院まで—	早産児の父親が児の出生から退院までにどのようなこととにストレスを感じているかを明らかにすること	突然の出産により出生した、早産児・極低出生体重児の父親	9名	半構造的面接
⑨	鶴他	2009	NICUに入院した児の父親の思いに対する分析—インタビューにより父親の思いを知り効果的な援助を探る—	NICU入院児に対する父親の思いを理解し、効果的な援助を考える	当院NICUに入院した患児の父親	5名	半構造的面接
⑩	山口他	2010	出生直後にNICUに入院した児の父親の思い—父親に対する看護を検討する—	児の出生直後にNICUへ入院する事で、父親は、医療者や母親・児に対してどのような思いを抱いているかを明らかにする	早産であり、未熟児のため出生直後にNICUに入院した子供をもつ父親	2名	半構造的面接
⑪	赤松他	2012	出生後に集中治療室へ緊急搬送された先天性疾患をもつ子どもの家族の体験	先天性疾患をもつ子どもが、集中治療室に緊急搬送され新生児早期手術の手術により、家族はどのような体験をするのかわ明らかにする	先天性疾患により集中治療室に緊急搬送され、術後に安定し退院した乳児を持つ家族	9例	半構造的面接
⑫	松岡他	2012	NICUに入院中の低出生体重児を持つ父親のストレスとコーピング	NICUに入院した低出生体重児をもつ父親のストレスとコーピングを知り、今後の看護介入に生かすこと	緊急帝王切開で出生した33週～34週の低出生体重児の父親	3名	半構造的面接
⑬	荒川他	2015	NICUに入院した子どもの父親における心理的プロセス	第1子が突然の出産からNICUに入院するという体験による、父親の心理的プロセスを明らかにする	NICUに入院した経験のある子どもをもつ父親	5名	半構造的面接

表2. NICU児の父親のネガティブな心理

大分類	小分類	文献で記述されていた内容例	文献番号
不安	子どもの成長・発達への不安	将来への不安	⑤, ⑧
		予後への不安, 障がいへの危惧	⑦
		小さい子どもの成長への不安	⑧, ⑩, ⑫
	子どもの病気や死への不安	病状への不安	⑤
		死への不安	⑦, ⑬
		子どもの病気がよくなったことがなかなか実感できない	⑪
	子どもの状態に対する気がかり	子どもの変化・変動への気がかり	⑧, ⑨
		小さい	⑨, ⑫
		(面会までの)待ち時間が長いと心配	⑨
		子どもの危機的状況の告知	⑬
	子どもの予後への不確かさ	予測不可能なことへの心配, 悪い予感	⑧, ⑫
	子どもに触れることへの不安	(触れる時に)触っていいのかな	④
		保育器外抱っこをやって不安	⑨
	子どもの移床の不安	GCUやコット移床したことへの不安	⑦
	妻に対する不安	妻がどんな反応を示すか不安	①, ⑥, ⑪
		妻の精神状態に対する懸念	⑧
父親としての役割遂行の不安	父親としての自分の心配	⑩	
生活上の不安	家庭生活での不安	⑧	
	金銭面での心配	⑩	
恐怖	子どもの死への恐怖	死んでしまうんじゃないか	②, ⑧
	子どもの状態を見た時の恐怖	未熟性や小ささへの恐怖	④, ⑧
	NICUに来て子どものケアに参加することへの恐怖	(触れる時に)折れそうで怖かった, 何をどこまでしていいかわからなかった	④, ⑦, ⑬
		NICUに来ることへの恐怖	⑦
悲しみ	治療中の子どもの状態を見た時の悲しみ	初めて面会した時の子どもの姿に痛々しさを感じた	①, ⑧
		医療器具に取り囲まれてかわいそう	⑧, ⑨
	期待通りで無かった子どもへの悲しみ	父親の期待とは違った外表奇形をもったわが子に嘆き悲しむ	⑤
	かわいそう	かわいそう(詳細記載なし)	②
戸惑い	子どもに触れることへの戸惑い	(初めて触れる時に)どこを触っていいかわからずどうしようという気持ちが強かった	⑨, ⑬
	子どもの状態が不明なことへの戸惑い	状態が分からない	③
	自分ができると思っていたことができないことへの戸惑い	見れない(面会できない), 抱けない	③
	疾患を持った子どもが生まれたことへの混乱と戸惑い	出生前告知を受けて出生後「やっぱりか」という戸惑い	⑤
		※胎児診断なく出生後に予後不良児であった混乱 (自分の子どもの誕生に対して)俺の子やろうか, 急な出産に対する戸惑い	⑤, ⑬
父親としての実感の無さ	父親としての実感がなかなか得られない	⑩, ⑫	
驚き	機械に囲まれ管を入れられた子どもを見た驚き	機械への驚き	⑦
		管や点滴が入っていてショック	⑨
	子どもの状態を見た驚き	早産で生まれたこと, 小ささ・色への驚き	⑦
	ショック	ショック(詳細記載なし)	②
	茫然自失	茫然自失な状態	⑧
苦しみ	妻に説明することの苦悩	(妻へ説明しなければならないことに)気持ちが重かった	①
		(妻へ説明しなければならないことに)このまま逃げ出したい気持ちだった	
	子どもの状態変化	(子どもの急変など)状態の変化に対する苦痛	⑦
	きょうだいへの申し訳なさ	きょうだいのストレスを感じ(子どもときょうだい)どちらにも我慢させて申し訳ない	⑪
	父親として果たす役割の辛さ	子どもの命の選択を考える。疲れきっている中, 治療に関する医師からの説明や同意書への記入といった初めて父親として果たす役割の辛さ	⑧, ⑬
	役割増加に伴う負担感	手続き・きょうだいの世話・仕事・妻の面会・家事などが大変だった	⑧, ⑪
成長することへの苦悩	※成長するのを見るのが辛い	⑤	

無力感	子どもに対する無力感	(子どもに対して)自分の無力に苦悩	⑤, ⑨
	妻に対する無力感	自責感を持ち続ける妻に対して慰めることしかできない	⑬
緊張	NICUという環境に対する緊張	NICUは医療器具に取り囲まれ緊迫感がある	④, ⑧, ⑫
逃避	意図的に子どもとの関係を絶つ	※児と接触することを避ける	⑤
怒り	どこにも向けられない怒り	※誰にも向けようのない怒り	⑤

※→予後不良児の父親のみから抽出された心理

(6) 苦しみ

《苦しみ》では、〈妻に説明することの苦悩〉や〈きょうだいへの申し訳なさ〉といった心理が挙がっていた。また〈成長することへの苦悩〉では、子どもの成長を見るのが辛い(文献⑤)という予後不良の子ども父親としての苦悩が見られた。

(7) 無力感

《無力感》は、〈子どもに対する無力感〉と、自責感を持ち続ける妻に対して慰めることしかできない(文献⑬)という〈妻に対する無力感〉の2つの内容に分類された。

(8) 緊張

《緊張》は、医療器具に取り囲まれ緊迫感がある(文献④, ⑧, ⑫)という〈NICUという環境に対す

る緊張〉という心理に分類された。

(9) 逃避

《逃避》は、予後不良の子ども父親のみにみられ、児と接触することを避ける(文献⑤)といった内容の〈意図的に子どもとの関係を絶つ〉が挙がっていた。

(10) 怒り

《怒り》は、予後不良の子ども父親のみにみられた心理であり、誰にも向けようのない怒り(文献⑤)が挙げられていた。

2) ポジティブな心理

対象文献から抽出した父親のポジティブな心理は、《喜び》, 《願い》, 《安心》, 《幸運》, 《受容》, 《決意》, 《感謝》という7種類の心理に分類された。ポジティブな心理の内容を表3にまとめた。

表3. NICU児の父親のポジティブな心理

大分類	小分類	文献で記述されていた内容例	文献番号
喜 び	子どもの誕生への喜び	子どもの誕生に感動した	①
		誕生の嬉しさ	②
		子どもの出生に対する喜び	⑩
	子どもの愛しさへの喜び	(子どもを)可愛い, いとおしい	①, ②, ⑤
	子どもの成長や良くなってきたことへの喜び	(カンガルーケアをおこなって)小さく生まれた子どもが実際にここ迄来たという喜び・嬉しさ, 成長への実感	⑦
		将来への期待感	⑬
	子どもと触れ合う喜び	(児に触れ)素直にかわいいと思う	④
		(児との触れ合いに対して)喜び, 愛しさ	⑤
	父親としての実感	父親になったんだな(詳細なし)	②
		(面会を重ねて得た)我が子としての認識	⑤
祖母に似ていると言われてわが子と感じた		⑨	
(おむつ交換やお風呂をやって)父親としての実感		⑫	
願 い	子どもの状態の回復への願い	子どもに元気になってほしい	①, ⑧, ⑨
		早く(保育器から出て)普通の通常の生活に早くなって欲しいと思っていた	⑬
	子どもの成長発達への願い	病気はあるけど元気に育ってくれたらいい	⑤
		予後への願い(五体満足であれば, 障害があってもきっと幸せに違いない)	⑦
		障害がないことへの願い	⑧
子どもへの応援	「(管や点滴, 機械に囲まれている子どもに対して)頑張れよ」	⑨	
安 心	子どもが誕生したことへの安心	生まれてきて安心	⑨, ⑩, ⑫
		会うまで1時間かかったため顔を見て安心	⑨
	良くなっている実感	顔色も良く普通に寝ているようで安心	⑨
		順調な経過に安心	⑨, ⑫
	医療者に診てもらえる安心	生存への希望(NICUにいれば安心, スタッフからの声かけ)	⑦
		専門治療が受けられるという安心感	⑩
周囲からの支えを実感することによる安心	相談する相手がいるという安心感	⑬	

幸運	前向きな考え方への変換	仕事で中々会えなかったが、機械につながれているのを見るとショックを受けるので、会えなくて逆に良かった	⑨
		大きな不安の中で自分たちなりの救いを見つける	⑪
		NICUに入院できたことや他の重症な子どもと比べることで危機的な状況の中での幸運を感じた	⑬
受容	諦めと覚悟	※生をあきらめ現状を受容	⑤
決意	妻に対する決意	妻の様子を窺い状態に合わせた支え	④, ⑥, ⑧
		意識して冷静に振る舞おうとした	⑪
		傷ついている妻を支えよう	⑬
	子どもに対する決意	子どもとの関わりによって「うれしかったというより頑張らなきゃ」	⑬
感謝	妻への感謝	妻に対する感謝	⑩
		妻の大変を思い、子どもを産み母親になった強さに対して尊敬の念を抱いた	⑬

※→予後不良児の父親のみから抽出された心理

(1) 喜び

《喜び》は、対象文献13件中9件で記載されており、ポジティブな心理の中で最も多かった。〈子どもの誕生への喜び〉や〈子どもの愛しさへの喜び〉を感じていることが伺えた。また、〈子どもの成長や良くなってきたことへの喜び〉、〈子どもと触れ合う喜び〉も得ていた。

(2) 願い

《願い》は、対象文献の約半分の文献で記載されている心理であった。子どもに元気になってほしい（文献①, ⑧, ⑨）、早く（保育器から出て）普通の通常の生活に早くなって欲しいと思っていた（文献⑬）といった〈子どもの状態の回復への願い〉が4件の文献から挙がっていた。また〈子どもの成長発達への願い〉では、障害があってもきっと幸せに違いない（文献⑦）、障害がないことへの願い（文献⑧）といった内容が挙げられていた。

(3) 安心

《安心》では、生まれてきて安心（文献⑨, ⑩, ⑫）といった〈子どもが誕生したことへの安心〉という心理が挙がっていた。加えて〈医療者に診てもらえる安心〉として、NICUに入院していること（文献⑦）や専門治療が受けられること（文献⑩）などに安心感を得ているといった内容も見られた。

(4) 幸運

《幸運》は、NICUに入院できたことや他の重症な子どもと比べることで危機的な状況の中での幸運を感じた（文献⑬）といった、〈前向きな考え方への変換〉という心理に分類された。

(5) 受容

《受容》は、予後不良の子どもを父親のみにみられ、生をあきらめ現状を受容するといった〈諦めと覚悟〉という心理が見られた。

(6) 決意

《決意》は、〈妻に対する決意〉では、妻の様子を窺い状態に合わせた支え（文献④, ⑥, ⑧）、傷ついている妻を支えよう（文献⑬）といった、父親が妻を

支えていこうと決意している内容がみられた。

(7) 感謝

《感謝》は、妻に対する感謝（文献⑩）や妻の大変さを思い子どもを産み母親になった強さに尊敬の念を抱いた（文献⑬）といった、〈妻への感謝〉がみられた。

VI. 考察

1. 研究の動向

本研究では、NICU児の父親の心理に関する文献について、1983年4月からを対象に4つのキーワードを用いて文献検索を実施したところ、対象文献の中で最も古い文献は2000年となった。このように、2000年以前にNICU児の父親の心理に関する研究が見られなかった背景として、NICU児の父親よりも母親に関する研究が多く進められていたことが考えられる。産業革命以降、男性は公的領域で有償労働を行い、女性は家内領域で無償労働を行うといった性別による領域と役割との分化が進められ、医学や心理学などの発達に伴って、子育ては出産や授乳の機能をもつ女性が専念した方がよいとする考えが強調されてきた（倉富, 2008）。このように、主に子育てをするのは母親といった文化的背景が存在し、これはNICU児に関しても同様であると考えられる。NICU児が退院して家で生活する場合、一般的な子育てに加えて、何らかの医療行為が必要になることも多く、NICU児の退院に向けた調整が看護師の役割として必要となる。そのため、退院後にNICU児の世話を主に行う母親に関する研究が必要とされてきたのではないかと考える。

また、1950年代までは夫や家族は感染の予防という理由で分娩室に入ることも制限されていたが、1960～70年代に夫立ち会い分娩などが増加し、子どもだけでなく家族も同等に大切にしようという動きが始まり、1980年代後半から1990年代にかけてファミリーセンタードケア（family-centered care : FCC）の概念が確立された（水野, 2009）。このように、ファミリーセンタードケアの重要性が認識され始めたことで、母親が

けでなく、父親に関する看護研究が増加したのではないかと考える。

2. NICUに入院中の子どもの状態

NICU児の父親の心理に関する研究では、NICU児の状態に関して、先天性疾患や奇形をもつ子どもが除外されていることが多く、対象文献の中で含まれていたのは2件のみであった。この背景には、該当する対象者が少ない、対象者から協力を得られないなど、対象者の確保が難しいということがあると考えられる。また、倫理的に研究を進めることが難しいことも一因として考えられる。

3. データ収集方法

対象文献13件のうち、11件がデータ収集方法として面接法を用いていた。対象文献のほとんどがNICU児の父親の心理を質的に明らかにすることを目的としていることから、面接法を選択したものであると考えられる。また、質問紙を用いた量的研究を行うために必要な対象数を確保することが難しいことも、面接法が多かった一因であると考えられる。

4. 父親の心理

対象文献からは、父親の心理の中で、ポジティブな心理よりもネガティブな心理が多く抽出された。こうしたネガティブな心理は、子どもや妻、父親自身など様々な対象に向けられていた。胎児診断を受けた場合を除き、一般的に父親は健康なわが子が生まれてくることをイメージしているといえる。しかし、子どもが早産や疾患・奇形などによって突然NICUへ入院し、NICU児の父親のそのイメージは予期せずに崩れてしまう。人は、予期せずに突発的に発生し、明らかに人の幸福感を脅かすと判別される出来事によって危機的な状況に陥るといわれている（小島，2013）。つまりNICU児の父親は、予期していなかった子どものNICUへの入院によって、ネガティブな心理を抱き、危機的な状況に陥っていると考えられる。また、胎児診断などでNICUへ入院することを出生前から知っていた場合でも、子どもの出生後に思い描いていたイメージが崩れ、同じくネガティブな心理を抱き、危機的な状況に陥ると考えられた。

その一方で、対象文献からは、父親のネガティブな心理だけではなく、ポジティブな心理も抽出された。ポジティブな心理の対象は、ほとんどが子どもに関するものであった。田中（2014）による、母子ともに正常に妊娠分娩を経過し、児体重が2500g以上の子どもをもつ両親を対象とした先行研究では、父親の【子どもに対する感情】として＜日々の成長が確認できて嬉しい＞や＜子どもの反応をみていると楽しい＞、＜苦勞を忘れるくらい可愛い＞、＜子どもが存在するだけ

で幸せ＞といったポジティブな語りが明らかとなっていた。NICU児の父親においても、子どもに対してかわいい・愛しいというポジティブな心理が対象文献から抽出されており、これらの心理は父親に共通しているといえる。

また田中（2014）は、NICU児ではないはじめての子どもをもつ父親の【子どもに対する感情】として＜どうして泣くのかわからず困る＞、＜寝ないでぐずるとイラつく＞、【親になった実感】として＜子どもの反応が薄くて実感がない＞といったネガティブな語りがあったことを明らかにしていた。このように、子どもの父親が抱くマイナスな感情は、初めての育児や父親としての実感などに対する感情であり、退院後に家で子どもと暮らす中で生じるものであった。この結果とは異なり、NICUに子どもが入院中の父親が抱くネガティブな心理は、子どもの生命や妻の精神面など心理の対象は様々であった。

5. 看護実践への示唆

対象文献から抽出されたネガティブな心理の中で、NICU児の父親は子どもの生命や成長・発達に対する不安だけでなく、初めて子どもに触れる時にどうしたらいいのかという戸惑いや壊れてしまいそうといった恐怖を感じていた。その一方で、ポジティブな心理の中では、子どもに触れたり、抱っこをしたり、カンガルーケアをすることで、かわいいと思い、喜びや愛しさを感じていた。このことから、NICU児の父親の心理は、子どもとの触れ合いを通して、ネガティブなものからポジティブなものへ変化しているといえる。そのため、NICUの看護師には、父親のネガティブな心理が緩和できるように、子どもとの触れ合いを積極的に促していくことが必要だと考える。また、NICU児の父親は子どもへの関わりにどうしたらいいのかという戸惑いを感じていることから、子どものどこに触れていいのか、どのくらいの力で触ればいいのかといった方法や、子どもにいつ触っていいのかといったタイミングなど、より具体的な方法を提示していくことが必要である。さらに、看護師も父親と一緒に子どもとの触れ合いに参加していくことで、父親の戸惑いを緩和することに繋がると考える。

また、子どもの状態に対してNICU児の父親はネガティブな心理を多く抱いているが、子どもが良くなっていることや子どもの成長・発達を実感することで、父親自身の安心に繋がっていた。このことから、NICUの看護師は、子どもが入院したことで抱いている父親のネガティブな心理を緩和するために、父親に子どもが少しでも良くなっているという情報の提供を行う、また父親自身が気付いた良い変化に共感するといった働きかけが必要である。

本研究で抽出されたNICU児の父親の心理は、ネガ

ティブな心理やポジティブな心理、子どもに対する心理、妻に対する心理など多岐にわたっていた。NICU児の父親はこのような心理の中で、子ども・妻への面会、日々の仕事、日常生活に必要な家事などを行っている。そのため、NICU児の父親への看護をする際には、このような多岐にわたる心理を理解した上で、それぞれの父親の心理をとらえながら看護実践をすることが望まれる。

6. 研究の限界と今後の課題

本研究では、NICUに子どもが入院中の父親の心理を明らかにすることを目的としており、子どもがNICUに入院したことによる父親の心理という視点で対象文献を選定し、子どもの状態に関する条件は設けなかった。そのため、子どもの状態によって異なる父親の心理までは把握することができなかった。また、子どものNICU入院後、どの時点における父親の心理かということまでは、対象文献から読み取ることができなかったため、明確な時期別の父親の心理の詳細を把握することはできなかった。

今回はNICU児の父親の心理を対象文献から抽出し、ネガティブな心理とポジティブな心理に分類したが、全ての父親の心理が必ずどちらかの心理に分類できるわけではない。そのため今後の課題として、子どもの状態別・入院後の時期別にどのような心理が明らかになっているのかについて、整理をする必要があると考える。さらに、NICU看護師が行っているNICU児の父親の心理に対する看護実践の現状も明らかにしていく必要があると考える。

引用文献

赤松園子, 浅野みどり (2012). 出生後に集中治療室へ搬送された先天性疾患をもつ子どもの家族の体験. 日本小児看護学会誌, 21(1), 40-47.

明石綾子, 横田佳保, 高見育世, 長浦英世, 山本寿美子, 渡辺希恵, 吉本 妙 (2006). 先天性外表面奇形をもつ児の父親の心の動き 急性期を脱するまで. 国立高知病院医学雑誌, 12・13, 65-70.

荒川恵美子, 中村真理 (2015). NICUに入院した子どもの父親における心理的プロセス. 福祉心理学研究, 12(1), 32-41.

濱田美代子 (2000). NICUに入院した極低出生体重児の父親の心理状態について—出生後早期における児の受容状況—. 小児保健研究, 59(3), 440-444.

川北 桂, 木下尚美, 庄山しづか, 里中美津子, 崎山啓子, 山下成子 (2000). 低出生体重児の父親の心理の変化—父親の不安と看護婦の認識の違い—. 小児看護, 31, 18-20.

小池伝一 (2009). NICU入院期間中の超低出生体重児の両親の家族形成過程. 日本新生児看護学会誌,

15(1), 20-27.

小島操子 (2013). 看護における危機理論・危機介入 フィンク/コーン/アグィレラ/ムース/家族の危機モデルから学ぶ. 14. 株式会社金芳堂. 京都.

厚生労働省政策統括官 (2018.1.22). 平成29年我が国の人口動態-厚生労働省.
<<http://www.mhlw.go.jp/toukei/list/dl/81-1a2.pdf>>.

倉富史枝 (2008). ジェンダー, DVと家庭. 木下謙治, 保坂恵美子, 園井ゆり (編): 新版 家族社会学—基礎と応用一, 127-141, 九州大学出版会, 福岡.

松本智津, 尾原喜美子 (2009). 早産児をもつ父親が感じるストレス 妻の入院から児の退院まで. インターナショナル Nursing Care Research, 8(3), 123-131.

松岡麻衣, 野田美恵, 小山絵里 (2013). NICUに入院中の低出生体重児を持つ父親のストレスとコーピング. 長野赤十字病院医誌, 26, 49-52.

宮崎つた子, 我部山キヨ子 (2003). NICU入院を経験した患児をもつ両親への意識調査 (第2報) 親の心理的特性. 母性衛生, 44(1), 127-133

水野克己 (2009). NICUのファミリーセンタードケアをめざして. 助産雑誌, 63(7), 622-626.

村山咲香, 岡本政枝, 中村友恵, 深田美穂子, 森田真紀子, 平井千晶, 古田ひろみ (2003). NICU入院の低出生体重児と対面する父親の思い. 日本看護学会論文集: 母性看護, 34, 73-75.

下野純平, 中村伸枝, 佐藤奈保 (2016). NICUに入院した児の父親に関する国内文献検討. 日本小児看護学会誌, 25(3), 69-76.

田中恵子 (2014). はじめての子どもをもつ両親の子どもへの思いに関する質的研究. 母性衛生, 55(1), 182-189.

田中紀子 (2007). NICUに搬送された子どもの父親が母親に伝える情報とその思い. 日本看護学会論文集: 小児看護, 38, 197-199.

鶴 有希, 北井真由美, 藤井恵子, 伊藤民子 (2009). NICUに入院した児の父親の思いに対する分析 インタビューにより父親の思いを知り効果的な援助を探る. 砂川市立病院医学雑誌, 25(1), 58-60.

山口真己, 笹尾みゆき, 中山三鈴, 尾崎是子 (2010). 出生直後にNICUに入院した児の父親の思い 父親に対する看護を検討する. 西尾市民病院紀要, 21(1), 13-17.

受付: 2018年11月30日
受理: 2019年1月28日